専門医症例報告

複製義歯を応用した無歯顎補綴の一症例

古屋 克典

An Edentulous Patient Who Received Duplicate Dentures

Katsunori Furuya

抄 録

症例の概要：患者は69歳の男性。全部床義歯の違和感が強いことを主訴に来院した。顎堤条件は上下顎ともに優型であったが、舌を突出する悪習癖を認めた。本症例では旧義歯を複製し、治療用義歯として用いることとした。その治療用義歯を参考にした新義歯を製作した。

考察：複製義歯を用いて、積極的に義歯の形態修正を行った。十分な治療期間を得たことにより、義歯に対する抵抗感を減らすことができたと考える。

結論：可逆的な治療方法である、複製義歯を応用することで、トラブルを回避しながら治療を進めることができ、良好な結果を得ることができた。

和文キーワード

無歯顎、複製義歯

ABSTRACT

Patients: A 69-year-old male patient visited our dental office with the chief complaint of discomfort caused by his complete dentures. Intraoral examination revealed that both mandibular and maxillary ridges appeared to be good and to retain the dentures although he had a habit of tongue-thrusting. The existing dentures were duplicated and used as treatment dentures in this case. New complete dentures were fabricated by referring to the duplicated dentures.

Discussion: The duplicate dentures method, in which dentures can be reversed after modification, enabled the duplicated dentures to be actively modified to reduce the patient's sense of resistance to the new dentures.

Conclusion: The application of duplicate dentures appeared to be useful in the process of replacing the existing dentures with new dentures.

Key words

edentulous, duplicate dentures

図1 Intraoral views at the first visit
初診時口腔内写真

I. 緒 言

義歯製作にあたり，治療用義歯を用いて顎位の修正・床形態の調整などを行うことにより，新義歯による治療効果の確実性を高めることが可能となる．このたび，上下顎無歯顎症例への新義歯製作にあたり，複製義歯を応用して良好な結果を得た症例を報告する．

II. 症例の概要

患者：69歳，男性．

初診：2005年3月．

主訴：入れ歯の違和感が強く，長時間装着できない．
基礎疾患：特記事項なし．

現病歴：約5年前に製作した義歯は上顎総義歯の装着時の違和感に慣れることができず，現在に至るまで未使用であった．現在は，さらにそれ以前に製作した義歯を使用しているとのこと（図1，2）．

現症：顎堤条件は上顎・下顎ともに優型であった．舌を前方へ突き出す悪習癖を認めた．5年ほど前に製作した義歯については，水平的咬合関係において，タッピングのばらつきは認められず，垂直的咬合関係については，顔面計測（Willis法）および下顎安静位測定の結果，3mm程度，低位と判断した．それに対して，現在，使用中の義歯については，広範囲に不適合であり，垂直的咬合関係についても，下顎安静位測定の結果，5mm低位であると判断した．補綴学会策定症型分類¹⁾ I-Iでは，Level IIであった．Satoらの咀嚼機能評価スコア²⁾は55%（11/20）で，患者満足度を示すフェ

図2 Current dentures
使用中の義歯

イススケール³⁾は11/20であり，口腔関連QOLの評価⁴⁾では，スコアが87であり，患者満足度は低かった．

診断：上下顎総義歯の不適合による咀嚼障害および感覚障害．

III. 治療内容と経過

1. 治療方針および計画

義歯による咀嚼障害・感覚障害を改善する治療方法として，①無口蓋義歯の応用，②インプラント治療の応用，③金属床義歯の応用を提示した．利点・欠点について十分な説明のもと理解を得たうえで，外科的な処置への抵抗，経済的な問題から，インプラント治療の応用と金属床義歯の応用は断念し，無口蓋義歯の応用を試みることを患者が選択した．新義歯製作するにあたり，旧義歯を改造し，それを，治療用義歯として使用する計画を提案したが，非可逆的な処置に対して

図3 Duplicate dentures
複製義歯

図4 Intraoral views with new dentures
新義歯装着時の口腔内写真

図5 Intraoral views at 3 years and 4 months after prosthetic treatment
補綴終了後3年4カ月経過時の口腔内写真

患者の同意は得られなかった。可逆的に処置を行うことを目的として、旧義歯を複製し、複製義歯を治療用義歯として用いることを患者へ提案し、同意を得た。

2. 処置内容

まず、初めの段階として、複製義歯を無口蓋義歯に改造し、使用を試みた(図3)。口蓋部の感覚に対しての改善は認められた。しかし、義歯の維持・安定が損なわれる結果となった。義歯の維持・安定を優先させる為に、口蓋部を覆うことに同意を得て、理解してい

ただき、再度、義歯の使用を試みるとともに、義歯の調整と患者への義歯の使用に対する教育を行った。治療用義歯にて1年ほど調整を繰り返し、患者の義歯に対する使用感にも変化が表れる結果となった。その結果をもとに、旧義歯を参考にした新義歯を製作した(図4)。新義歯製作中もワックスデンチャーでの試適時に、より慎重に患者の感覚及び要望を聴取し、床縁形態についての理解を求めた。

3. 術後の経過

新義歯装着後、現在まで、6 カ月毎の定期検診を行っている。維持・安定ともに良好であり、床粘膜面についても適合状態には問題は認められない。装着後、3 年 4 カ月を経過しているが、現在まで良好に推移している (図 5)。

4. 術後の機能評価

初診時、55%であった、Sato らの咀嚼機能評価スコアは 75%になり、患者満足度を示すフェイススケールは 11/20 から 5/20 に改善した。口腔関連 QOL の評価においても、初診時は 87 であったスコアが 40 となり、患者満足度にも改善がみられてきている。

IV. 考 察

義歯の不適合により粘膜の疼痛、義歯の安定の阻害などがみられることがある。義歯が動くことにより患者は口腔内での違和感と認識し、咀嚼の困難や感覚障害へとつながる。新義歯を製作するとき、旧義歯がある場合、それを改造しながら調整を行い、新義歯を製作する。本症例では、患者の同意が得られず、旧義歯を改造して、治療用義歯として使用することが出来なかった。そこで、複製義歯を応用し、義歯に適切な床縁形態の付与、咬合高径の設定、患者への義歯に対する理解を求めて治療を進めていくこととなった。複製義歯を用いたことで十分な義歯の改造と調整、そして、患者教育を行うことができ、主訴の改善につながったと考えられた。

V. 結 論

日常臨床において、義歯形態を大幅に変更することが効果的な症例が存在する。複製義歯の利用は、後戻りのできる方法であるとともに治療効果が確実となり、トラブルを回避することが可能となると考えられる。

文 献

- 1) 社団法人日本補綴歯科学会 医療問題検討委員会. 症型分類 特に歯質、部分歯列欠損、無歯顎について. 補綴誌 2005 ; 49 : 373-411.
- 2) Sato Y, Minagi S, Akagawa Y, Nagasawa T. An evaluation of chewing function of complete denture wearers. J Prosthet Dent 1989; 62: 50-53.
- 3) Lorish CD, Maisiak R. The face scale: A brief, non-verbal method for assessing patient mood. Arthritis Rheum 1986; 29: 906-909.
- 4) Yamazaki M, Inukai M, Baba K, John MT Japanese version of Oral Health Impact Profile (OHIP-J). J Oral Rehabil 34: 159-168, 2007.

著者連絡先：古屋 克典

〒 101-0061 東京都千代田区三崎町 2-9-18

Tel: 03-5275-1760

Fax: 03-3262-3420

E-mail: kfuruya@tdc.ac.jp